

「新たな時代の保育実践」～すべての子どもに向けて～

— 1～2歳児の自我のめばえと葛藤体験 —

～保護者と共に支え合う保育を目指して～

千葉県印西市 印西市立もとの保育園

保育士 小能見 理沙

保育園の概要

定員 120名 現員 103名 職員総数 34名 設立年月日 昭和47年 4月 1日

設置市区町村概要

人口 97,300人 保育所数 (公立) 7か所 (私立) 15か所

1 はじめに

子ども達の生活や遊びを見直してみると、4、5歳児でも自己主張が強すぎる子や自己主張ができない子の姿が見られ、心が年齢相応に育っていないのではないかと感じました。その要因は1～2歳児頃の大人の関わり方に関係があったのではと仮説しました。また、いけないことをした我が子を制止できなかつたり、子育てに困っている保護者がいることから、保護者の気持ちに寄り添い、子育ての方法を一緒に考えていく必要性が感じられました。そこで、自我がめばえたり、十分な葛藤体験の必要な1～2歳児を対象に、自我の育ちを保護者と共に支え合う保育について研究をしていくことにしました。

2 研究の方法

- ・自我のめばえや自己主張が見られた場面で、子どもの姿や保育者の関わりを観察、記録する。
- ・プリントや連絡ボードで、子どもの発達の特徴や大人の関わり方などの情報を提供する。
- ・行事を通して、保護者と共に子どもの育ちを支え合う方法を検討、実践、考察する。
- ・アンケートを実施しその結果を踏まえ、保護者の思いやニーズを把握し子育て支援や保育につなげる。
- ・職員間の共通理解を図るための取り組みを検討、実践していく。

3 研究の結果

(1) 自我のめばえ・葛藤体験期の子どもの育ちを支える保育

1、2歳児クラスで自我のめばえや葛藤体験が見られた場面を事例として取り上げ、子どもの発達や気持ちの受け止め方、関わり方について検討しました。初めは、保育者自身もどのように対応したら良いのか分からなくなったり、子どもが長泣きになってしまうこともありましたが、職員全体で話し合い、考察する中

で保育者の関わり方にも変化が見られました。

<事例③サブ資料P 7> 2歳児クラス、トイレに行くために上履きを脱ぐ場面。HくんとSちゃんが場所の取り合いになり、互いに押し合っていました。Hくんが押し出され泣いてしまったという事例です。

保育者は2人の本当の気持ちを聞き出したり、気持ちに共感したいと思いをかけましたが、Hくんは納得していなかったように思います。

事例を通し、Hくんのねこの壁面の前で上履きを脱げなかった悔しい気持ちを受け止める関わりができるようになった、早く解決したいという保育者の思いが強くなってしまったので、一緒に考えたり、折り合いをつけられるような関わりができれば良かったという担任の反省がありました。

<事例④サブ資料P 9> 2歳児クラス、朝のおやつ場面。8月～12月頃の長期にわたって、子どもの姿や保育者の関わりの変化について記録、考察をしました。

(8月～9月頃) Sちゃんは、女の子の絵の描いてある牛乳でないと泣いたり飲まなかったりしました。保育者はSちゃんの気持ちも分かるが、みんなが好きな牛乳の絵を選ぶようになると困るので、Sちゃんだけ牛乳を選ぶようにしたくないと思いました。

(10月～11月頃) 2つの思いから保育者の関わりを変えるようにしました。

①できるだけSちゃんの思いに寄り添えるようにしたい。

Sちゃんにどちらの絵の牛乳が良いか聞きながら配ると、Sちゃんは「おんなのこ。」と言ってうれしそうに牛乳を受け取りました。

②Sちゃんに男の子の絵の牛乳が配られることもあると伝えたい。

「Sちゃんは女の子の絵の牛乳がいいんだね。女の子がある時はSちゃんに女の子を渡すね。でも、Sちゃんに女の子を渡せないこともあるの。そうしたら、男の子でも我慢してくれるかな？」と言うと、Sちゃんは「うん。」と答え、牛乳を飲み始めました。

(12月頃) Sちゃんは、「せんせい、Sちゃん、おとこのこでもいいよ！おとこのこ、おんなのこどれでもいいの。」と言う声が聞かれ、男の子の絵の牛乳であっても、笑顔で飲むようになりました。

“全員が好きな絵を選び始めたら困る”と思い、Sちゃんの思いを聞き入れようとする姿勢が持てていなかったことを反省し、10月頃から、保育者の関わりを変え、“女の子の絵の牛乳を飲みたい”という気持ちにできるだけ寄り添うようにしました。“女の子の牛乳が飲みたい”という気持ちを理解されたことで、喜びや安心感を味わい、“女の子の絵の牛乳”というこだわりから離れることができたのだと思います。

子どものイヤイヤや葛藤の場面においては、子どもの行動の理由や気持ちを理解し、それに合わせた関わりや援助が求められます。“～してほしい”という保育者の思いを伝える前に、まず子どもの気持ちを理解し受け止めてもらった喜びや満足感を味わえるようにしていくことが大切です。子どもは“気持ちを受け止めてもらえた”“自分は大切にされている”と感じ、仮に要求が通らなくても我慢ができるようになるのだと感じました。

また、イヤイヤ、葛藤体験期の子どもの成長を決して急がず、子どもの気持ちの切り替わりや成長を待つ保育者の姿勢が大切で、その姿勢が子どもの安心感や自己肯定感につながっていくと思われま。具体的なエ

ピソードを交えながら、友達との関わりや遊びの様子を互いに伝え合い、家庭と園の両方で同じ目線や方向性を持って育ちを支え合えるようにしていきたいです。

(2) 1、2歳児クラス保護者へのアンケート調査の実施

保護者がどのような場面で困っているかを知るために、アンケート（サブ資料P12）を実施し、アンケートの読み取りを行いました。その結果、家庭でも子どものイヤイヤや自己主張をする姿が見られていることやそれに対してどのような対応をしたら良いかわからない、気持ちを切り替えられるまで待つことが大切だとはわかっているものの無理矢理させてしまうなど、保護者自身葛藤しているということがわかりました。

これらの結果から、イヤイヤ期の大人の対応について伝えていくことが必要であり、困ったことや悩みに回答できる機会を作ることが求められていると感じ、クラス便り特別号（サブ資料内資料2～4）を作成しました。保護者からは、「いつでも見られるところに貼り参考にします。」「同じように悩んでいることが分かり安心しました。」という感想が聞かれました。また、特別号の配付をきっかけに、保護者から子育ての悩みを相談されることが増えました。

(3) 行事を通して子どもの育ちを支え合う

1～2歳児の子ども達と保護者が親子で楽しく安心して参加できる保育参加を目指し、ねらいや内容を見直しました。ねらいを達成するためにはどのような内容にしたらいいか、どのような配慮が必要か考え取り組みました。また、保育参加後には保護者から感想を聞き、反省と考察をしました。

ふれあい遊びや製作を楽しむ親子の姿が見られ、保育参加のねらいは概ね達成できたと思います。しかし子どもが保護者に甘え離れられなくなってしまい、困っている保護者もいました。遊んでいる姿の録画を見てもらい、安心したり成長への期待を持てたのではないかと思います。が、“日頃の子どもの姿が見たかった”という保護者の要望を受け止め、保育参加の仕方を見直して保育参観という方法を検討していきたいです。

(4) 連絡帳を通して子どもの育ちを支え合う

サブ資料P20事例①、事例②については、1歳児イヤイヤ期の様子が伝わってくる事例と食事や睡眠など生活面についての事例を取り上げました。連絡帳は子育ての悩みや園での様子をタイムリーに伝え合うことができます。連絡帳に書かれた悩みに返事を書くことに加え、送迎時などを利用して直接話ができるように配慮し、保護者の表情を見たり、気持ちを察しながら答えていくように心がけました。

連絡帳に書かれたことに対して否定せず受け止める姿勢を持ち、悩みや疑問に丁寧に答えていくことが大切です。また、連絡帳の重要性や必要性を踏まえ有効に活用するために、保護者が書いた内容の読み取りや書き方についての保育者の技術を高めていかなければならないと考えました。

(5) 個別面談を通して子どもの育ちを支え合う

直接話をするすることで、保護者の表情や話し方から保護者の思いをより感じることができる個別面談について（サブ資料P24、25 2歳児事例）その取り組みを振り返り考察をしました。

我が子や子育てに関する保護者の思いを受け止めたつもりでも十分に受け止められていないことがあり、そのような場合保育者からの話やアドバイスは保護者に受け入れてもらえませんでした。保育者の思いを伝えることを優先せず、まず保護者の気持ちや子どもの今の姿を受け止めていくことが大切です。

また、話をするだけでは伝わりにくいことでも、録画した子どもの様子を見てもらうと、保護者が理解しやすくなるので、保護者や状況に合わせ、より伝わりやすい方法を見出していくことが求められます。

(6) 職員間の共通理解のための取り組みについて

いろいろな職種や勤務形態の職員がいる中で、子どもへの関わり方など、どのように共通理解をしていったら良いのか、園内研修、クラス会議、ケース会議、保育資料回覧などの取り組みを行い、その効果について全職員より聞き取りをし反省や考察をしました。結果を以下の4点にまとめました。

- ・回覧だけでは理解しにくい内容については、まとめた資料を配付していく。
- ・職員間のコミュニケーションが十分であったかを振り返り、話し合いを増やしていく。
- ・子どもの姿や保育の方法の話を繰り返すことで、子どもを肯定的に見たり、保育の方向性の統一につなげていく。
- ・職員間の人間関係として互いに尊重する、何でも話せる聞ける関係を築くことが大切であると考えました。

4 まとめ

① 1、2歳児のイヤイヤ・葛藤体験の姿を受け止め、より良い育ちを支える保育

子どもの気持ちを受け止めたり、子どもの成長を待つ姿勢を持つことが大切です。また、保育者間で適切な関わり方を話し合い共通理解をしたり、保護者との連携で育ちを支え合っていくことが求められます。

② アンケートの実施、保護者の困っていることや悩みを踏まえた子育て支援

クラス便り特別号の配付、子育てのアドバイスのプリントの配付。1歳児と2歳児では、保護者が困っている場面や悩みに差が見られたので、それらに対応するため年齢に合わせクラス便りの内容を検討しました。

③ 行事を通して子どもの育ちを支え合う取り組み

1、2歳児の子どもや保護者にとって参加しやすい行事を目指し、親子で期待や意欲を持って安心して参加できるようにしたり、録画した子どもの様子を見てもらい子どもの成長を確認し合ったり、家庭と園で同じ方向性で子育てをしていけるようにしました。

④ 自我のめばえ・葛藤体験期の育ちを支え合う取り組み

連絡帳や個別面談を活用し、保護者の思いを肯定的に受け止めたり、気持ちに寄り添えるようにすることで、互いに思いを理解し合い、子どもの育ちを見据えた関わり方や援助の仕方において協力していけることが実感できました。

⑤ 1、2歳児の子どもを保護者と共に理解し合う取り組み

子どもの姿や気持ち、発達について保護者と保育者が適切に理解して関わっていくことが大切です。保護者との信頼関係を築き、家庭と園での様子を伝え合いながら、子どもの成長の見通しや期待を持てるようにしていくことが求められます。

5 今後の課題

① 保護者との子どもの育ちの支え合いを他の年齢にも広げていく。

② 今年度行った取り組みの反省を踏まえ、次年度の保育に活かしていく。

③ 子どもの発達や関わり方について、保育者間で共通理解し、クラスに合わせた取り組みを検討していく。